



# 図書館報 みかづら

和歌山県立医科大学図書館三葛館



## 目次

館長ごあいさつ -----	1	本と人生 -----	7
心に残る言葉と心に残る本 -----	2	三葛館に思うこと -----	8
図書館への想い -----	3	読書で“思ひ出す事など” -----	9
私にとっての図書館 -----	4	大学生活で経験した本の「宝探し」 -----	11
図書館から始まる世界 -----	6	令和元年度三葛館活動記録 -----	12

## 館長ごあいさつ.....

### 図書館報みかづら第24号の刊行に当たって

図書館長 (保健看護学部 教授) 森岡郁晴

図書館三葛館では、今年も「図書館報みかづら」を学生、教職員ならびに学外者に向けて刊行します。第24号では、7名の先生方にご執筆をいただきました。それぞれの方の本や図書館についての思い出などをお読みください。また、三葛館で実施している「ベストリーダー賞」の1位を受賞された方からの寄稿も載せています。この賞は、上松右二先生のところで少し紹介されていますが、4年間の図書の貸し出し数が多かった学生に授与されるものです。

昨年の巻頭言では、「来年度は、図書館をくつろげる施設にもすることで、余暇時間に本を楽しむ場としても利用してもらえるような試みも考え、来館者を増やしていきたい」と書かせていただきました。しかし、この考えに大きな問題が立ちました。そう、新型コロナへの対応です。

教職員、学生の利用に制限を加え、また夜間と土日を閉館にしました。さらに、一般の方の利用制限など、多くの皆さんにご不便をおかけしてしまいました。このような対応で、これまでなんとかコロナ禍を乗り越えてきたと感じています。ご理解、ご協力いただいた関係各位に心から感謝します。

4月以降もコロナ禍がすっかり良くなることはありませんので、今後も種々の対策が必要です。図書館としては、これからも十分な対策と利用者の利便性のバランスを検討していく必要がありますが、図

書館長の任期は3年ですので、今後のことは後任の図書館長に任せることになります。3年間の皆様のご支援に感謝しています。「ありがとうございました。」

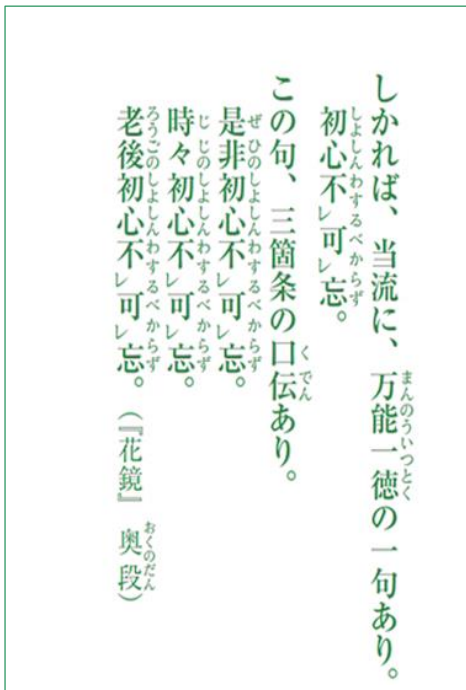
一方、4月には薬学部が開設され、そのキャンパス内に伏虎館が開館されます。今後の図書の充実を関係の方々をお願いしています。そして、伏虎館への皆様の来訪をお待ちしております。

.....

## 心に残る言葉と心に残る本

保健看護学部 学部長・教授 柳川敏彦

「初心忘るべからず」という言葉を皆さんはご存じだと思います。しかし、およそ600年前、能を大成した世阿弥(ぜあみ)の言葉だということを知らない人は多いのではないのでしょうか。一般的に「はじめの志を忘れてはならない」という意味で使われますが、世阿弥が言った「初心忘るべからず」は、もう少し複雑で繊細な意味を持っています。



左の文章をご覧ください。わかる通り、世阿弥が言う「初心」は「最初の志」に限られてはいません。世阿弥は、人生の中にいくつもの初心があると言っています。若い時の初心、人生の時々々の初心、そして老後の初心。それらを忘れてはならないというのです。

この言葉から、それぞれの自分の立場に照らし合わせて頂ければと思います。学生の皆さんには、大学入学時、あるいは新しい学年になった時、そして初めて社会に出る時にこの言葉を思い浮かべて頂ければと思います。教職員の皆さんは、新しい年度毎に、あるいは昇格、昇任の機会になるのでしょうか。私自身は、老後の初心という言葉に胸に刻みたいと思います。現在の置かれた立場・状況に安住することなく、いろいろと勉強し直して、その次の段階にいけるというのです。

さて、私事ですが、平成16年4月の保健看護学部開設から令和3年3月31日の17年間、保健看護学部でお世話になり、何度か図書委員、三葛館長をさせて頂きました。保健看護学部の学生の皆さんに接して強く感じたことは、保健看護学部の学生の方は、実に三葛館をうまく活用しているということです。そして多くの書物を読んでいるということです。

そこで、皆さんに機会があれば是非読んで頂きたい1冊を紹介したいと思います。それは、「代表的日本人」という本で、キリスト教思想家として知られる内村鑑三が明治時代に西欧社会へ向けて英語で著した、「Representative Men of Japan」の和訳本です。岩波書店から出版されています。西郷隆盛、上杉鷹山(うえずぎようざん)、二宮尊徳、中江藤樹(なかえとうじゅ)の5人の生涯と思想、そして、彼らがいかに

して優れた仕事を成し遂げたのが語られています。日本が世界に誇れる5人ですので、どの年代の方にもお薦めできる本です。はたして、代表的日本人たる人格を持った日本人が、現代にどれほどいるのでしょうか。

## 図書館への想い

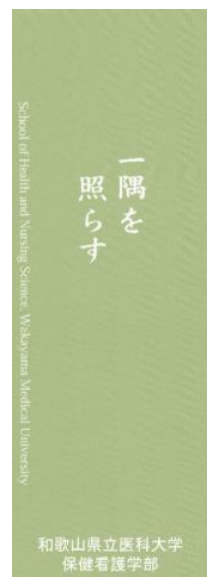
保健看護学部 教授 上松 右二

今春、定年にて引退するにあたり、第24号への寄稿を依頼されました。少し複雑な心境ですが、私の図書館への想いや読書について述べたいと思います。

「図書館報みかづら」は、平成10年に初刊され継続されてきています。日頃からの図書館運営に、今日まで携われてきた、また、現在携われている図書館員はじめ教職員の方々に感謝申し上げます。私自身、平成16年の保健看護学部開設時に医学部より移籍し、17年間のおつきあいになります。この間、平成16年、18～19年、令和2年に図書委員会委員および委員長（副図書館長）を務めさせていただきました。その開設当時を振り返ってみますと、図書館の主といった雰囲気の庄司禎夫先生がいらっしゃいました。また、短期大学部から4年生大学への改組のための図書倍増計画があり、蔵書が随分と増加した黎明期であったと思います。当時、オリジナルの葉を学生と共に作成したことや卒業生への読書表彰（ベストリーダー賞）を企画した思い出があります。今もこの表彰が継続されていることをうれしく思います。また、「図書館報みかづら」第8、10、20号に寄稿させていただきました。

本学図書館は、質の高い保健看護職を育成し地域へ貢献する学部の教育理念の一翼を担い、学生、教員の学習と研究を支援する使命を有しています。さらに、和歌山県内を代表する医療系大学として、県内の保健看護職の方々への資料・情報を提供し、生涯学習・研究を支援する役割も担っています。私の好きな言葉に、比叡山延暦寺開祖の伝教大師最澄の「一隅を照らす」があります。本も私達に一隅を照らしてくれる1つであります。大学人として、この使命を忘れずに、図書館運営に尽力して行って頂きたいと思います。

読書に対する想いですが、無理なく引き込まれてついつい読んでしまう本が最も良いと思います。その本の中に、素晴らしい言葉を見つけたり、情景を浮かべることができたりすると幸せな気持ちになります。これが、本との出会いの醍醐味でしょう。さらに、その本の著者がどのような人物なのか、なぜこのように書き示せるのかも興味深いです。ゲーテは、「書物は新しい知人のようなものである。」と述べていますが、読書の形として自分との考えの差異を認識した読み方を勧めています。また、齋藤孝は、守りに入らず苦手な書物も読むようにし見識を広める努力をしていると述べています。皆様も自分のスタイルで読書



を嗜むようにされては如何でしょうか。

今日まで、私がよく読んだ作者を一部ご紹介します。歴史や紀行については、司馬遼太郎がお勧めです。図書館にも、司馬遼太郎全集がございます（残されていれば）。歴史の中から人を見つめることができると思います。人生の中で、迷いなどある時には宗教的な本も良いかと。梅原猛、高森頭また、渡辺和子シリーズも良いです。また、励ましが欲しい時には、五木寛之が良いでしょう。さらに、人の生死について考えるには、柳田邦男シリーズがお勧めです。

これからも素晴らしい本との出会いに期待しています。かのミケランジェロは、晩年、他人に近頃どうなさっていますかと問われた時、“Ancora imparo（おれは今でも勉強しているよ）”と答えたとのことです。この言葉から、日本脳神経外科コンgresでは“Ancora imparo e creo（おれは今でも勉強し、創造しているよ）”と修飾しモットーとしています。読書を通じて、生涯学習を続けていきたいと思えます。

## 私にとっての図書館

保健看護学部 助教 阿部 雅

私にとって初めての図書館は、私が育った町の公民館内にある図書館でした。幼い頃、母によく連れていってもらったことを覚えています。寝る前に母がしてくれる読み聞かせの時間が大好きで、一緒に読み聞かせ用の本を選びました。また、今思い返してみても理由はよく分からないのですが、クリスマスを題材にした絵本が大好きで、特にそれだけは自分から借りたいと手にとり、何冊も抱えて帰ることもありました。当時、文字が沢山読めなくても、絵本から伝わるクリスマスのわくわく感から、自分だけの想像に浸るのが好きでした。海外の絵本特有の、鮮やかな色づかいやユーモア溢れる絵に惹かれ、その絵を真似て描いて遊んだりもしました。しかし、年を重ねるごとに絵本を読むことはなくなり、それを見て自分だけの世界に浸ったり未知の光景に想像を膨らましたりすることは本当に少なくなりました。大人になって調べる知恵が付き、今では何でもスマホで調べて、自分が知らない国や景色のリアルな光景をその場で見ることができます。「想像をかきたてる」瞬間や機会がなくなり、こうして幼い頃にしか味わえない気持ちや経験を、図書館で借りた沢山の絵本を通して教えてもらったなと思います。

幼い頃のほんわかとするような図書館との思い出をお話しましたが、年を重ねるにつれ、絵本から「本」「参考書」になり、読みたい本から「読まなくてはならない本」へと変わっていきました。私自身、皆さんと同じ大学生の頃は、こんな本を読みたい！と積極的に図書館を利用する学生ではなく、課題やレポートが出るたびに調べ物のために足を運んでいました。突如リアルな大学生時代の話となってしまいましたが、本を手にとる時は、調べたい内容と合致しているかひたすらにページをめくり、参考にして、書いて、提出する。その一連の作業でした。幼い頃に無我夢中で本を手にとり、わくわくとした気持ち

を味わう場所、そんな私にとっての図書館は、その頃とはまるで違う場所になっていました。

そんな学生時代を経て看護師となり、働き始めてからはよく図書館へ足を運ぶようになりました。調べ物のために、レポートのために・・・ではありません。何のために・・・？患者さんのために。でした。受け持ちAさんがしてきた術式、術後のドレーン排液、なんであんな色してたんだろう？オペ後、すごい疼痛訴えてたな・・・。あの時使ってた薬・・・。例えば新人の頃はそんな1日の中で起きた数え切れないほどの疑問を考えながら本を探していました。と同時に、オペ出棟前、Aさんと手術室に向かうエレベーターで「手術が本当はすごく怖い。」と涙した表情や言葉も浮かんだりします。この手術にかける思いや恐怖感、家族への思いなど、こちらがはっとさせられる瞬間を、慌しい病棟や日常から少し離れた静かな図書館で考えさせられる時間がありました。患者さんを通して、幼い頃の絵本を手にとる時のふつふつとした熱量が呼び戻されたが如く、必死になって知らない自分の知識を埋めようと本を手にとりました。患者さんのことをもっと分かりたいという思いが、知りたい意欲や疲れていても図書館に足を運ぶ原動力になっていたのだと思います。

今や、有名出版社からの看護・医学系参考書等もスマホ、PC等でダウンロードして見るのが当たり前、効率的に、リモートで・・・と今のご時世で図書館に足を運ぶことが少なくなった方もいるかもしれませんが。あらゆる情報を手軽に収集できるインターネットは私達の生活を便利に、そして豊かにしてくれ、生活からは切っても切り離せない存在となりました。一度、スマホやPCを開き、ブラウザで検索するだけで、何十万件といった情報が目に入ってきます。現代社会においては、人が消化できる情報量の何百倍もの情報が溢れている、情報過多の時代と言えます。自らの疑問について、自らが理解し、選んで調べる機会が減ってきていないでしょうか。また、すぐに情報が手に入る分、想像したり思考したりするまでに至りにくいのです。

そんな時代の中で、図書館とは自分が意図して、自らの手で情報や知識を選ぶ貴重な場所なのではないかなと思います。時と場合にはよりますが、たまには本という二次元の媒体から、自らの想像力をかきたてることも大切ではないでしょうか。あの静かな図書館という空間で、本を借りるという目的だけでなく一息おいて考えを整理したり、この機会に新たな本に出会ってみたりするのも良いかもしれません。どんな本が置いているのか、はじめは眺めてみるだけでも意外と自分がひっかかっていたことや、興味のある内容の本に手がのびたりします。皆さんの中のふつふつとした熱量を、何かのきっかけで自分の中で感じてもらえたらな、と思います。



## 図書館から始まる世界

保健看護学部 助教 羽 畑 正 孝

みなさんが図書館を利用する時は、大抵の場合、お目当ての本をPCやスマホで図書館HPから蔵書検索し、一目して見つけられることかと思えます。時間がない時や急を要する時にはものすごく便利で、私も図書館を利用する際は、ほぼこの方法です。でも、蔵書検索してお目当ての本を見つけて終わりだと、何かもったいないなあと思う時があります。

図書館をどうすれば有益に利用することができるのかと考えました。そして、ふと気づきました。「今日は何もすることがないなあ。何か時間が潰せそうなことはないかなあ。そうだ、図書館で本を読もう」と思えばいいんだと。理由は何であれ、図書館に足を踏み入れることが大切です。

図書館の書棚には、所狭しと多くの書籍が並び、かつ同じような分野の書籍が上下段や左右に並んでいて、「こんな本があったんか。自分が探していたものより良いではないか」と思う時は、何か得した気分になれます。また、皆が目につくように新刊が並べられていたり、雑誌や視聴覚教材もあったりし、ここはまるで学問の原石を磨く宝庫であると気づきます。まさしく、「木を見て森を見ず」や「鹿を逐う者は山を見ず」といったことではいけないと実感する瞬間です。図書館は、自ら育つための読書力や、情報の活用能力・新たな情報をつくり出して社会に貢献できる力をつけてくれる場所だと思います。

また、学問を探究する時に役立つ過去の文献を陳列しているのも大学図書館ならではのです。今の時代、電子ジャーナルも増えてきましたが、中には電子ジャーナルでない雑誌もあるので、図書館の蔵書には重宝しています。

図書館には司書さんがいます。司書さんとは、書籍の貸出の手続きなどの事務的なやりとりで終わってしまっているのではないのでしょうか？私も初めはそうでした。しかし、自分が目当てとしている書籍を蔵書検索しても思うものを見つけないことができなかった時には、適切な資料を検索、提供してくれたり、新刊などの資料を選定してくれたり、「人と本の距離を縮める」役割をしてくれます。これを活用しない手はないです。図書館を有効利用することに一役買ってくれています。調べものをしている時は、自分で探索しながら調べることも楽しい時間ですが、往々にして時間がないことが多く、多くの資料を探すとすると限界があります。自己では見えていないことも複数の人、それも専門の方に協力を得ることができるのもメリットです。

インターネットが普及しており、すぐに世界中の豊富な情報が検索でき、今やビジネスや学習、生活、どれにおいても必要不可欠なものとなってきています。インターネット上で情報を得るのも、書籍で情報を得るのも結果は同じかもしれませんが、しかし、書籍の場合、文章読解力や語彙力が増えることや文章記述力が身につく、専門知識やその分野に関する学術知識が身につく、など多くのメリットがあります。特に、結果を得るまでの過程において、答えに辿り着く思考プロセスが自然と鍛えられるので、思考力を養うことができ、今まで知らなかった話題やジャンルに触れることができたり、知識を深めたりすることができます。自己の発言力に説得力を出すことができたり、コミュニケーションをとることがうまくなったりすることで、人とのつながりが広がる可能性があります。自分が手にした1冊の本から世界が広がることは、その人の生きがいにつながるのではないかと考えます。

三葛館には、看護系の書籍だけでなく、教養や医学系の書籍も多く蔵書していますので、自己研鑽のために、図書館を訪ねてはいかがでしょうか。本稿が少しでも皆様の図書館利用のきっかけになれば幸いです。

## 本と人生

保健看護学部 教授 山本 明 弘

もう何十年もむかし、一人暮らしを始めてから何度もアパートを引っ越すなかで、いつも一番の荷物は本の入った段ボール箱でした。もう読むことのない本もたくさんありましたが、新しい畳のにおいを感じながら本棚に本を並べることが、私にとっての新生活の儀式でした。孤独と不安と仕事疲れの中で、ぼんやり一冊一冊の背表紙をながめて「若き日へのノスタルジー」に浸ることが、私にとっての安上がりな癒し法でした。やがて結婚して子供が生まれて、いつしかわが家の本棚は絵本とマンガとぬいぐるみで埋まっていき、私の本達は段ボール箱の中へとしまいこまれました。それから何年もの時が過ぎて、最近になって物置を空ける必要ができて本を処分することになり、懐かしい思いで何冊か読み返してみたのですが・・・違うのです。やはりというか、リルケ※のいう「問い」の中に生きていたあの頃の私ではなく「答え」の中に生きている今の私に、“あの感覚”がわき起こるはずありません。

だから私は学生さんにお伝えしたいのです。“今読むこと”のかけがえのなさを。

※ Rainer Maria Rilke (高安国世 訳)『若き詩人への手紙 若き女性への手紙 (第66刷)』新潮文庫、2017年。

### 電子ブックのご案内

和医大図書館では、参考図書や洋書を中心に電子ブックを導入しています。電子ブックは、学内 LAN に接続されたどの端末からでも利用可能です。OPAC (蔵書検索) で「電子ブック」と入力すれば簡単に検索が行えます。また、図書館三葛館 HP の「電子ブック」欄の提供元一覧からアクセスすることも可能です。ぜひ、ご利用ください。

- ★ Maruzen eBook Library : 丸善株式会社による日本語電子ブック配信サイト
  - ★ Books@Ovid : Ovid 社が提供する医学系電子ブック配信サイト
  - ★ Wiley Online Library : Wiley 社が提供する電子ブック・電子ジャーナル配信サイト
- 三葛館電子ブック案内サイト : <https://opac.wakayama-med.ac.jp/drupal/ebteach>

## 三葛館に思うこと

助産学専攻科 講師 上野 美由紀

最近では読まなければならない本が増えて、少し難しい書籍を手にするが多くなりました。講義や研究などで使う資料を探すために三葛館に足を運んでは、ついでに他の本を手にとってパラパラと斜め読みして借りています。そのときの気持ちの赴くままにタイトルや表装、著者名、雰囲気などを見て、読んでみようとして手にとります。電子ブックでも本は読めますが、紙のページを指でめくり触れる、五感をつかい、読み進んでもまた読み戻れる本は、やっぱり手放せないものです。

助産学実習が終わる頃、学生と「男性助産師」の話になりました。日本では男性看護師が9万5千人を超え（約8%）、男性の保健師もいます。しかし、男性助産師はいないことについてです。昭和23年（1948年）保健師助産師看護師法第一章、助産師の定義では「助産又は妊婦、じょく婦若しくは新生児の保健指導を行うことを業とする女子をいう」とされています。ですが、昭和29年（1954年）頃までは「男性の産婆さん」が存在し、「トリアゲジイサン」や「コトリドン」、「ヒゲジイ」と親しみをもって呼ばれていたようです。板橋春夫著『叢書・いのちの民族学1 出産 産育習俗の歴史と伝承「男性産婆」』社会評論社は大変興味をもって読みました。今から70年ほど前には性差を越えて、地域で信頼できる男性の産婆がたくさんの子どもをとりあげて活躍し、亡くなったあとには石碑まで建立されていたのです。夜中や寒い冬の時期でも、お産があればすぐに駆け付けて赤子を取り上げ、産婦さんを助けていた産婆の活躍について、もし、興味があれば読んでみてください。

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大の恐れから、生活するなかで不自由なことが多くありました。マスクをして飛沫を防ぎ、**Social distancing**（社会距離拡大戦略）、手を洗い、触れたところは消毒する。とても大切なことですが、五感（視る、聴く、嗅ぐ、味わう、触れる感覚）を活かして看護を実践する私たちは、突然『自粛』という名の活動制限を余儀なくされ、誰もが少々うつ状態になったと感じます。

「人類の歴史は病との闘い。ペストやコレラ、天然痘、ポリオを抑え込めたのは医療の進歩と国際協力による。しかしマラリアの蔓延、エイズ、新たな感染症が次々と襲いかかる」（詫摩佳代著『人類と病 国際政治から見る感染症と健康格差』中公新書）。ヒトはこのような危機を何度も耐えて生き抜き、研究をすすめて遺伝子型ワクチンを開発しました。「はやく打ちたい」、「いや打ちたくない」、打ちたくても打てない人もいます。医療者として様々な葛藤をしながらも、家族や仲間、周囲の人たちと気兼ねなく集まり、たわいもない話をして、歌い（踊り？）、食事を存分に楽しめる日常を取り戻したいと切に願います。





## 読書で“思ひ出す事など”

医学部 教養・医学教育大講座（数学・統計学） 教授 武田好史

冒頭から「数学者にとっての図書館とは …」などと気負って書き始めたところで、すぐ息切れしてしまうことが見えているので、これまでの読書の遍歴、特に数学とは全く関係のない私的な読書歴から“思ひ出す事など”を書き留めることとしよう。

さて、どんな切っ掛けであったのかの記憶はもう定かでないが、大学生の頃にカミュの「異邦人」を読み、強い衝撃を受けた。もしカミュを高校生の頃に読んでいたら、きっと異なる理想像や将来像を思い描き、異なる方向を目指して努力していたであろうとまで思った。それまで「理系人間」を自負し、また「小説で感動するなんて、ただの自己陶醉では？」とむしろ懐疑的であったため、いわゆる名作とされるものにも全く縁がなかった。そんな青春時代を過ごしてしまったことを、当時は落ち込む程に後悔した。その後手当たり次第ではなかったが、時折り思い付きで「車輪の下」、「狭き門」、「変身」、「罪と罰」、「アンナ カレーニナ」等々を読んできた。

「歴史小説」や「ノンフィクション」に比べ、完全な“虚構”たる「小説（フィクション）」の方が作家の創造力や構成力が問われるものである。また「随筆」では自説を一方向的に述べることも多いのに対して、「小説」では複数の登場人物による会話の形式を取ることで、異なる視点や立場からの意見が必要となる。当然、それらの設定が貧弱であると薄っぺらい小説になってしまう。その点、ドストエフスキーなどは素晴らしいと思った。「小説はあまり読まないが、エッセイを読むのが好き」などとのたまう人がいると、「一方向的なものの見方をする人」とレッテルを貼り付けたくなくなった。かつては「小説で感動するなんて …」であったのだから、人間変われば変わるものである。

やがて「この日本語訳、なんか気に入らない …」と思うことも多くなってきた。もっとも原文を知らないのでは、本当のところはわからない。しかし、日本語らしくない日本語は一度気になると、もはや読むのが苦痛ということもあった。かと言って、「原文で読んでみよう！」なんて気力は今さら湧いてこない。ならば日本の小説を読めば良いのではないかと考え、「ころ」を手を取った。漱石の小説は、国語の授業で断片的に触れたことはあったが、長編を通してというのは初めてのことであった。

結果はというと、“感動”とか“衝撃”とは違うものが、しばらく脳裏から離れなかった。それは、上述の外国の小説から受けたものとは異質なものであった。その後は、しばし漱石に没頭することとなった。「山路を登りながら、かう考えた。… 兎角に人の世は住みにくい。…」等々、日々感じたり、考えたり、悩んだりしていることが、漱石の小説の中ではより深く展開されていることを知った。また「夢十夜」により、無理して外国の小説に手を出す必要はないとも悟った。そして、「漱石を高校生の頃に真剣に読んでいれば …」と再び思った。

ところで、漱石の思想の中では「自己本位」と「則天去私」がよく取り上げられ、「自己本位と則天去私は相反するものではなく …」等の解説を見掛けることも多い。もちろん専門家の方々に異を唱えるものではないし、また素人ながら自分でも似た様な考察をつい試みてしまったりもする。一方で、少し冷静に内観すればわかる通り、我々自身も、周囲の人々も、取り巻く社会も“矛盾”に満ち溢れている。

「高等遊民」しかり、「不条理人」しかり。むしろ、“心”の中にある矛盾こそが我々人間の本質なので

あり、人工知能との相違点なのである。そして、その心に整合性を求めようとする、それも“不条理”な行為の一つなのである。

多くの場合、小説の主人公への周囲からの評価は終始一貫して「変わり者」であるが、本人の心の中は常に思い悩み、揺れ動いている。しかし、周りには理解してもらえない。そんな部分に感情移入できるならば、推理小説の様な“謎解き”も、あるいは“大団円”や“落ち”も必要ない。そう、“モヤモヤ”が読み終えた後も適度に残るのが、小説らしい小説ではないだろうか。

そんな小説を多く残した漱石の随筆「思ひ出す事など」や「硝子戸の中」についても、着眼点に共感したり、教えられたり、考えさせられたりと興味深く読めた。なので、「随筆が好き」という人に対してかつて抱いていた一方的な偏見も、今はない。

## MIKAZURA NOW!

2019 年度 利用統計	
年間開館日	295 日
入館者数	20,890 人
(1 日平均)	70 人
貸出人数	4,937 人
図書貸出冊数	12,634 冊
視聴覚資料貸出件数	135 点
相互利用依頼件数	252 件
相互利用受付件数	657 件
学外利用者数	378 人

三葛館の蔵書 2019	
蔵書冊数	63,807 冊
うち洋書	9,231 冊
所蔵雑誌種数	1,062 種
うち外国語	148 種
年間受入図書冊数	1077 冊
うち洋書	10 冊
年間受入雑誌種数	650 種
うち外国語	14 種
(2020/3/31 現在)	

### ご存知ですか？マイライブラリ

マイライブラリとは、学内者を対象とした図書館 Web サービスのページです。学生の皆様は入学時のオリエンテーションにて、設定済みかと思えます。

図書館ホームページ右上の「ログイン」または「ゲストさんマイライブラリ」をクリックし、ユーザーIDとパスワードを入力すると、マイライブラリにログインができます。

ユーザーID：図書館利用者カードに記載されている番号

パスワード：マイライブラリ申請の際に決めていただいたパスワード

※お忘れの方は平日 17:30 までにカウンターにお越しください

以下のサービスがお使いいただけます。

- ・自身の貸出中の資料とその返却日の確認
- ・他の利用者が利用中の資料への予約
- ・ブックマーク機能
- ・文献複写依頼 など

便利なマイライブラリをぜひご活用ください♪



## 大学生活で経験した本の「宝探し」

令和2年度ベストリーダー賞第1位 卒業生 藤江穂香

この度は、ベストリーダー賞をいただきありがとうございます。普段から自宅に「積読」をして楽しんでいる私にとって、とても光栄な賞であり、また私の想像以上に自身が図書館を利用していたことも驚きでした。大学生活で「なにもの」かになるという私の目標が達成できたかはわかりませんが、大学生活の良い思い出になりました。

振り返れば、新型コロナウイルス感染症の影響で最終学年はオンライン実習・講義となり、一日のほとんどを自宅で過ごした一年でした。一人暮らしの私は誰とも話すことがない時間も多かったですが、本があることで不思議と寂しくはありませんでした。私にとって医療に関する本は一冊一冊がとても高価なものなので、学びたい内容を掲載する本が豊富に揃っている図書館を利用することはいわば「宝の山」に入るような感覚でした。図書館を利用してたまたま目についた本棚から気になる一冊を手にとるのもよし、興味がある分野から手にとるのもよし。本はいつでも読者の隣にあり、読者の知識を助けるだけでなく別世界にもいざなってくれます。そして「宝探し」の感覚で本と触れ合うための時間を十分にとることができるのは、おそらく大学生活が最後なのだろうと感じています。

大学生活でしか向き合うことのできない本の「宝探し」を、ぜひ図書館を利用することで体験してもらえたらと思います。「積読こそが完全な読書術である」という本もあるように、「宝探し」の方法は人それぞれです。時間をかけて自分なりの方法を探っていくことも有意義な時間になるはずです。その経験が今後のあなたの糧になり、図書館で心が動かされる一冊に出会えることを祈っています。

最後になりましたが、三葛館の司書さんには大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

### 令和2年度保健看護学部卒業生の表彰を行いました！

令和3年2月2日に在学中貸出冊数上位者の表彰を行いました。

今年度の卒業生1人あたりの平均貸出冊数は196冊で、第1位の方の貸出冊数は828冊でした。

新型コロナウイルス感染流行対策のため、広い講義室で十分な間隔がとられ、いつもと少し異なる状況下ではありましたが、受賞者の発表の際には、皆さん拍手をくださり、例年通り和やかな表彰式となりました。

写真は表彰式にて、森岡図書館長とベストリーダー1位を受賞された藤江穂香さんです。卒業生の皆様、4年間たくさん図書館をご利用いただきありがとうございました。



### 床工事を行いました

8月5日～9日の蔵書点検による閉館期間中に、三葛館事務室内の床の張替え工事を行いました。また、学習室のカーペットも張替えました。明るいグレーを基調とし、グリーンを差し色にしたシンプルですが落ち着いた色合いです。綺麗になった学習室を早く皆様に利用していただきたいです。



▲工事中の事務室内の様子



▲カーペット張替え後の学習室

## 令和元年度（2019年度）三葛館活動記録

- 4月5日 保健看護学研究科 新入生オリエンテーション
- 4月8日 保健看護学部 新入生オリエンテーション  
医学部 新入生オリエンテーション  
助産学専攻科 新入生オリエンテーション
- 7月31日 第1回保健看護学部図書委員会
- 8月5～9日 蔵書点検
- 10月11日 第2回保健看護学部図書委員会
- 1月31日 第3回保健看護学部図書委員会
- 2月5日 令和元年度保健看護学部卒業生ベストリーダー表彰式

### 編集後記

第24号は8名の方々にご寄稿いただきました。様々な視点からの図書館や読書・学ぶことへの思いが詰まった内容となりました。

2020年は新型コロナウイルスの出現により、日常が一変し、この状況下で図書館はどうあるべきか、思索する1年となりました。

今後も皆様に安全・快適に図書館をご利用いただけますよう努めて参ります。



令和3年3月30日発行

図書館報 みかづら (第24号)

編集・発行 和歌山県立医科大学図書館三葛館

〒641-0011 和歌山市三葛 580 番地

TEL (073) 447-2300 (代表)

(073) 446-6721 (三葛館)

FAX (073) 446-6730 (三葛館)

<https://opac.wakayama-med.ac.jp/drupal/>

